

書きたい気持ちを育てる

Cultivation Method of Desire to Write

村 松 純 光

はじめに

本稿は私が現代コミュニケーション学科の基幹科目「日本語文章表現法Ⅰ」でおこなった演習について報告するものである。本科目を担当して三年目となるこのタイミングで講義全体を概観し、内容の精選を図りたいという純粋な授業者としての気持ちと、これを叩き台に国語科教育関係者も含めた同業者各位から批判を仰ぎ（できれば喧々諤々の議論をおこない）、「国語」「日本語」間の風通しをよくしたい気持ちの両方に突き動かされて、というのが執筆の主たる動機である。特に後者の便宜を考え、かつて私が高等学校科目「国語表現」（平成21年告示の旧学習指導要領上の選択科目）の授業内でおこなった「書くこと」指導の実践事例にも言及するつもりである。

第1章 報告の目的

「はじめに」で述べた二つの執筆動機はそのまま執筆の「目的」と言い換えて差し支えない。改めてここで二つの動機について詳述し、本稿が目指すところについて確認をしておきたい。

(1) 授業改善 ～ 進化し続ける授業のために ～

「日本語文章表現法Ⅰ」の受講者数は三年前の初年度が25名、昨年度が41名、今年度が39名と推移している。本年は昨年より微減となったが、分母となる学生の総数が年々減っていることを考えれば堅調と言っているのかもしれない。他学年の名も知らぬ受講生と絡む演習が多いこと、ほぼ毎時けっこうな量の宿題が出ること、提出課題が原則実名で共有され即批評の対象となることなど、前年度の受講者から少しでも内情を聞いていれば敬遠するのが無難なこの講座を、よくこれだけの学生が履修してくれたものである。受講者数＝前年度講義の評価と都合よく考えたい私からしてみれば大いに励みとなる数字であるが、実は授業には三年目にして早くもマンネリズムの兆しが顕れ始め、一度きりの受講者である学生諸君（稀に再履修者がいるが）には気付かれなくとも、授業者である私自身がその寒々しさに耐えがたさを感じるようになってきた。これが冒頭に述べた本稿執筆動機の一つ「純粋な授業者としての気持ち」の内訳である。

(2) 高大接続 ～ 「国語」から「日本語」へ ～

かつての職場・高等学校に在職中、私は国語科教諭として雇われ、時の高等学校学習指導要領

「国語編」に位置付けられた科目を教えていた。今現在私が新たな職場・大学にどのような立場で雇われているのかと言うと、改めて採用条件票にあたってみれば、そこには「国語」も「日本語」の語もなく、あるのは「言語学（コミュニケーション学）の分野」を学生に教授し、自らもその研究に従事するように、といった文言である。学習指導要領がなく、検定教科書がなく、従って教員免許状もない世界に今は暮らしているが、そうは言っても目の前にいるのはついこの間まで「生徒」と呼ばれていた、私には懐かしい人たちである。「学生」と呼び方が変わったからと言って、彼女らが一足飛びに大人になってしまったとは考え難い。「国語」も同様に、急には「日本語」に（まして「言語学」には）なれない。必ず移行期があるはずである。少し前まで盛んに言われた高大接続という考え方を科目単位で実現するとしたら、私にできるのは「国語」と「日本語」との仲をうまく取り持つことだと考えた。これが冒頭に述べた本稿執筆のもう一つの動機『『国語』『日本語』間の風通しをよくしたい気持ち』の内訳である。

ところで、『ライティングの高大接続』という本（※1）の序章の中に次のような文章を見つけた。高校・大学間におけるライティング学習・指導の問題点について書かれたものである。

「（略）問題とは、ほんらい一連・一体のものであるべきライティングの学習や指導が、高校と大学の双方でそれぞれ独立かつ自己完結的に、しかも、いくらか断絶や重複を露呈しながら行われていることだ。つまり、高校における「書くこと」の学習・指導が大学におけるレポートに備えるものとなっておらず、また大学におけるレポート指導が高校までの「書くこと」の学習をふまえて生かすように行われておらず、そうしたことのために生じるムリ・ムダがほの見える。」

いくら学習指導要領に「書くこと」の重要性がうたわれていても、国語教科書に「書くこと」領域のアクションが一定量掲載されていても、実際の教室でそれが取り上げられる可能性は高くない。科目「国語表現」を教育課程に置いている学校であれば、その授業内で「さあ、書きなさい」という場面はあるだろう。ただその内容が「大学におけるレポートに備えるもの」となっているかは甚だあやしいし、そもそも「国語表現」を開講している学校はいわゆる進路多様校であって、必ずしも大学進学を念頭に置いた「書くこと」指導をしているわけではない。進路指導として入試小論文の面倒はみるかもしれないが、大学入学後のレポート作成まで見据えた指導というのは考えにくい。もし、それらしいものがあるとすれば、教科国語ではなく、探究活動等においてであろう。

結論めいたことを言えば、高大接続と言うものの科目レベルでのそれは、双方の思惑の違いもあって極めて困難な作業である。学習指導要領に依った教育をしている（であろう）高校「国語」が、個々の教員の研究成果に依った教育をしている（であろう）大学「日本語」とのドッキング法を模索中、という話も、主客を違えた逆の話もあり聞かない。生徒・学生の現状を見てそれぞれで学習メニューを編んでいるのが実際であろう。高・大の双方が、互いにこうあって欲しいと要望するのは大事なことであるが、まずはそれぞれが今日の前にいる若者に必要な「国語力」「日本語力」とは何かを、指導実践例の報告と交換を通じて見極め、目標地点を共有することに注力してみるのはどうであろうか。今や高校も大学も多様な学力の生徒・学生が集う場としては似た空間であ

る。学習領域も（とりわけ文系科目は）ここまでは高校、ここからは大学と単純に線が引けない現状があるわけだから、補習やレメディアルを含め指導内容の重複は恥じることでも恐れることでもないように私は考える。一部の進学高校・研究開発型大学は例外として、重要な学習項目は教授法を変えて（時に同じでも）高・大どちらでも教える、がスタンダードで何の問題があろう。

私は、国語科教員であった私個人の「やり残し」を大学で徹底しておこなうことで「ひとり高大接続」に努めているつもりである。高校で扱った項目を再び大学で？と咎める気持ちは皆無である。高校で満足にできなかったのであれば大学でじっくりやる。新鮮な気持ちでもう一度、かつての高校生を相手にじっくりと文章表現法を講じる。指導内容に高校と重複する点があるにしても、対象が成人となったこと、学習指導要領及び検定教科書の縛りから自由になったこと、授業時間が倍となったことで、例示できる文章の幅や演習のヴァリエーションは確実に豊かになった。その点だけとらえても、本講義はやはり大学仕様なのである。

第2章 授業理念と目標

具体的な実践報告を始める前に、科目「日本語文章表現法Ⅰ」の授業が目指すところについて以下の通り三点からまとめてみた。(1)(2)については高等学校科目「国語表現」でもほぼ同じ考え方で授業をおこなってきており、要は読者の存在を予想した「公的表現」(※2)に慣れ親しんでいこう、ということである。(3)は受講生が今や全員「成人」であることから「大人」らしい理屈を与えたもので、短大での文章指導ということを強く念頭に置いている。教育行政の色が付いた「生きる力」の語の使用には慎重を要するところであるが、あらゆる教育のステージを一貫する大きな概念であり、高大接続の一例について報告する本稿にはむしろ適切と考えた。

(1) 「書くこと」の習慣化 ～ まずは量をこなす ～

2024年度版シラバスにおいて私は本授業「日本語文章表現法Ⅰ」の目的と目標を次のように定めた。「演習を通じ『書くこと』の日常化を図ることで、文章で表現することへの抵抗感を減らしていくことができます。また、その過程で論理的思考力も身に付けることができます。」まずはここに述べた理屈について説明を試みておきたい。

「書くこと」が習慣化され当たり前の日常となれば過度な構えや緊張はおのずと消えていくだろうし、場数を経るうち内容も整理されたものに変わっていくはずである。他者の目に多く晒されることで表現も洗練の度を増していくに違いない。文章は読まれることで美しくなる、などと書けば観念的で時代錯誤な言説だと批判されそうだが、読者の目・耳を意識し、その立ち位置から自分の文章を点検することの習慣化ができたならば、それは論理的思考力の基となる客観性の獲得が成ったということである。また、実際の授業ではそうした客観性（もうひとりの自分という読者の目）の元で書かれた自作が本物の客観（リアルな読者の目）に晒されることにより“健全に”傷つき、建て直しや修繕を余儀なくされる。このストレスに耐えながらなお文章で表現することを諦めない

人間性は、本学現代コミュニケーション学科のディプロマポリシー4「ジェネリックスキル」の考え方に合致する。

(2) 「大人」になって書く訓練 ～「子ども」から「大人」へ～

長く高校生を対象に「書くこと」の指導をおこなってきた。高校教員の多岐に渡る業務には生徒との接点が無数にあるから、国語の授業だけでなくHR活動や進路指導等の時間も「書くこと」指導のチャンスである。担任、生徒会顧問、学年の総合学習係等、様々な顔でこれと向き合ってきた。当時おこなった実践については既に別媒体で報告済み(※3)であるため詳細は省くが、指導を通じて強く感じたことは、彼ら彼女らの多くが「書くこと」に厳粛になり過ぎているか、馴れ馴れしくなり過ぎているかのいずれかで、「中庸」は稀であるということである。見ず知らずの他者を前に緊張で声が出ないウブな子どもと、誰彼かまわず「タメ口」で通してしまうお行儀の悪い子どものいずれかで、いずれにしても子どもであり、大人ではない。私が本授業の受講生に求めているのは「大人」であれ、ということである。大人らしい語彙を用いよ、ということよりも、もっと大人らしく自分を演じてみよ、ということである。これについては次項に譲る。

(3) 「生きる力」を身に付ける訓練 ～「自分を操る」技術の習得～

かつて福田恆存は「教養について」と題した文(※4)の中で、ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』からヒルダ(チャタレイ卿の妻コニーの姉)が森番メラーズと面会した場面を引き、メラーズの「力をぬいた」「自分を演じている」手こそは教養だと書いた。そして「自分を演じている」ということについて、氏一流の比喻を用いて次のように解説した。

「(略)『自分を演じている』というのは、自分で自分を操ることでなければならない。それは、力学的に言えば、適切に力を用いるということです。対象が物体であれ、人間であれ、私たちは始終、さまざまな対象とぶつかりあっている。そのぶつかりあいが、すなわち「生きること」なのであります。たとえば、私たちは戸を開けたり閉めたりする。そのために力を用いる。それは戸を操ることであると同時に、自分を操ることにもなるのです。そのばあい、私たちは無意識のうちに、自分の力と戸の重さとの関係を計量しながら、適切に力を用いているのです。力をだしすぎてもいけないし、だしたりなくてもいけない。したがって、適切に力を用いるというのは、適切に力をぬいていることなのです。」

私はこの教養論をあるべき「大人」論として読んだ。「自分を演じ」る力とは「自分で自分を操る」力のことであり、「適切に力を用い」「適切に力をぬく」技術を持ち合わせていることこそは教養ある大人の絶対条件である、と読んだ。前述したように、かつて私が指導した高校生も、今日の前にいる短大生も、この「大人」になりきれしていない。匿名でものを書く場はいくらもあったが、自分の名前で堂々ともものを書く場には乏しかったはずの彼ら彼女らは、「自分を演じ」「自分で自分を操る」「適切に力を用い」「適切に力をぬく」ことに慣れていない。匿名の全てが悪いわけではないが、ここにはどうしても甘えと怠け心が生じる。結果、演じることに億劫になり、力加減を誤

りがちである。昨今のSNS等での誹謗中傷問題はその発露ではないか。実名であれば客観（リアルな読者の目）を前に力加減の調整を求められ、自身の責任としてそれを引き受ける態度も育つ。

シラバスにも示してあるが、授業内で書く文章は全て実名で受講者全体に共有される。第1回授業でもこのことについて丁寧にアナウンスするようにしている。それでは何も書けない、というのであれば科目登録修正期間内に辞退すればよい。それは受講生の自由である（実際のところは、そういう学生はほとんどいない）。自分が思っていること考えたことを包み隠さずあらいざらい書きなさいという要求であるならば、勘弁してくださいというのも解るが、書き手である自分にも読み手である他者にも配慮した表現を、というのが真のお題である。書く内容、書き方を自ら「適切に」加減して「大人」らしい文章を書くトレーニングをおこなうのが本授業である。先の引用文の中で福田恆存は「ぶつかりあいが、すなわち『生きること』」と書いていたが、他者からの批評に晒され“健全に”傷ついた受講者が、そこから立ち上がって次なる表現に向かうという展開こそは「生きる力」の物語ではないか。

第3章 授業実践の報告

これより「日本語文章表現法Ⅰ」全15回の演習の内訳について詳述していきたい。授業は大きく前半の第1～6回をノンフィクション編、間の第7回をギアチェンジのためのクッション回とした後、後半の第8～14回をフィクション編として展開した。締めめの第15回はファイナライズ回として全演習をふりかえるメニューを用意した。後半のリレー小説の試みなど、高校「国語表現」でおこなってきた演習にアレンジを加えたものが一定量を占めるが、演習の裏付けとなる理屈の習得にも重きを置き、理論と実践との往還を強く意識した授業を心がけている。これにより高等教育としての質は十分に担保されているものと考ええる。また、シラバスの「授業内容」欄に「より良く『書く』ためには日本語を『読む』『話す』『聞く』技能にも習熟しておきたいものです。そのために敢えて『書く』に偏らないさまざまな演習を用意しました。」と書いたとおり、コミュニケーション力強化のためのペアワーク、グループワークも随所に盛り込んである。

以下に2024年度に実施した授業の実績を端的に記載する。理論の説明や導入教材の読解にあたるものには「理」、演習にあたるものには「演」、宿題には「宿」を冠した。また、「理」の中でも特に説明が必要と思われるものには★印と番号を付し、第4章で別途解説をおこなうこととした。

【第1回】子どもの文章・大人の文章 2024.4.9(火) 実施

- ・「理」子どもの文章の特徴とは 市内在住54歳男性が小学生時に書いた作文を読んで考える★(1)
- ・「演」子どもの文章を書いてみよう テーマ「4月9日 今日の記事（子ども版）」
- ・「演」宿 大人の文章を書いてみよう テーマ「4月9日 今日の記事（大人版）」

【第2回】お金がもらえる文章 2024.4.16(火) 実施

- ・大人の文章≠お金がもらえる文章
- ・【理】お金がもらえる文章の特徴とは さくらももこ先輩の名エッセイを読んで考える★(2)
- ・【演】宿 お金がもらえる文章を書いてみよう テーマ「私の高校時代」

【第3回】「描写」力を鍛える(1) 2024.4.23(火) 実施

- ・【理】読者の脳内でその光景（場面）がリアルに映像化されるような技巧「描写」
- ・【演】状態、様子、質感の表現に有効な「比喩」の活用演習
- ・【演】宿 今、目の前にある光景（場面）を「描写」してみよう

【第4回】「描写」力を鍛える(2) 2024.4.30(火) 実施

- ・【理】私たちはどれだけ正確にものを見ているか、どれだけの確にものを伝えているか
- ・【演】視覚の正確性 文章で表されたある動物を絵に描いてみよう（写真で答え合わせ）
- ・【演】宿 描写の的確性 「アルマジロ」を初めて見た人が、その形状を人に伝える

【第5回】「見る」とはどういうことか(1) 2024.5.7(火) 実施

- ・【理】小林秀雄「美を求める心」読解 「黙って物を見る」とはどういうことか考える★(3)
- ・【演】「黙って物を見る」ことのトレーニング
- ・【演】宿 黙って（シャープ）ペンを見て、その形状を丁寧に人に伝えよう

【第6回】「見る」とはどういうことか(2) 2024.5.14(火) 実施

- ・【理】情報をどういう順に並べたら読みやすく解りやすいか考える
- ・【演】前回の演習課題（宿題）の相互添削と反省 「編集」のトレーニング
- ・【演】宿「ダブルクリップ」を見て、その形状を丁寧に人に伝えよう

【第7回】「展開」とはどういうことか 2024.5.21(火) 実施

- ・【理】ノンフィクションからフィクションへ（物語の「展開」のパターン）
- ・【理】グリム童話「おじいさんと孫」を用いた実験（高校生対象）の結果から判ること
- ・【演】「展開」予測演習 ショートショート2作品から学ぶ「オチ」
① 小松左京『新都市建設』（1965） ② 星新一『ボッコちゃん』（1958）

【第8回】文章は「相談」することで続く(1) 2024.5.28(火) 実施

- ・【理】「書く」行為のメカニズム 前の文と「相談」して（よく読んで）次の文を考える★(4)
- ・【演】リレー小説「書き出しの一文」コンテスト
- ・【演】ひとり1文リレー小説(1) 1～15文目まで

【第9回】文章は「相談」することで続く(2) 2024.6.4(火) 実施

- ・プロの技巧にふれ、小説脳に切り替える 夏目漱石『夢十夜』より「第一夜」(1908)
- ・**演** ひとり1文リレー小説(2) 16～28文目まで

【第10回】文章は「相談」することで続く(3) 2024.6.11(火) 実施

- ・プロの技巧にふれ、小説脳に切り替える 筒井康隆『にぎやかな未来』(1968?)
- ・**演** ひとり1文リレー小説(3) 29～37文目まで
- ・**演宿** リレー小説の38～45文を各自で考えて完結させる(タイトルをつけポータルから提出)

【第11回】文章は「相談」することで続く(4) 2024.6.18(火) 実施

- ・プロの技巧にふれ、小説脳に切り替える 速瀬れい『のちの雛』(2001?)
- ・**演** リレー小説「オチ」鑑賞会 合評と優秀作品の選出(投票による)
- ・**演** 「第1回楓文学賞」決定 候補作4点の紹介(音読)と決選投票 当選作「董」

【第12回】文章は「相談」することで続く(5) 2024.6.25(火) 実施

- ・プロの技巧にふれ、小説脳に切り替える 村上春樹『沈黙』(1991※ 2006加筆修正) … 1
- ・**理** 星新一の創作理論「ひらめきの法則」の読解(講演をCD音源で聴く) ★(5)
- ・**演** 実践「ひらめきの法則」 「異質なものを」を組み合わせさせてストーリーを作る演習
- ・**演宿** 異質な2語に関わりあう30文ショートストーリーの創作(ポータルから提出) 後日製本

【第13回】文章は「相談」することで続く(6) 2024.7.2(火) 実施

- ・プロの技巧にふれ、小説脳に切り替える 村上春樹『沈黙』(1991※ 2006加筆修正) … 2
- ・**演** 偶然を必然にする「ハプニング俳句」の試み 演習を通じて「脳力」を鍛える
- ・**演** 他者から提供された5音・7音のアイテムを活かしたハプニング俳句の作成と意味づけ

【第14回】文章は「相談」することで続く(7) 2024.7.9(火) 実施

- ・プロの技巧にふれ、小説脳に切り替える 村上春樹『沈黙』(1991※ 2006加筆修正) … 3 (終)
- ・**演** 30文ショートストーリー作品集のグループ鑑賞会(合評会)
- ・**演宿** 「第2回楓文学賞」選考 ショートストーリー全作を読み優秀作3点をポータルから投票

【第15回】「日本語文章表現法Ⅰ」ファイナライズ 2024.7.16(火) 実施

- ・「第2回楓文学賞」選考結果の発表 当選作「進化」(カエル×寿司)
- ・**理** 全授業のふりかえり 二つの「文章表現法」
- ・**理** 様々なサンプル・手本にふれる ⇒ 「型」の習得 ⇒ スタンダードな「文章表現法」の獲得
- ・**理** 一定量を何度も書く ⇒ 「文体」の確立 ⇒ いかにも自分らしい「文章表現法」の獲得

第4章 「書きたい気持ち」を呼ぶしかけ

前章の授業実績一覧の中で特に★印を付した五つの「理」（理論）について順に説明したい。理論と言うと大仰だが、いずれも受講生の中に潜在している（と私は信じている）「書きたい気持ち」をくすぐり、「書く」に向かわせるのに有効なエピソードである。これらを演習の前ふりとして味わうことで、「書く」という行為にストーリー性が加わり、そのストーリーの当事者たる自分が「書く」ことに必然性が生じてくる。書き手の意識も「書かされている」から「（自ら）書く」へと変化する。いやらしい言い方をすれば「その気にさせて書かせる」というだけの原理であるが、ただやみくもに書かせるのではなく、「書きたい気持ち」にさせてから書かせる、という自然な流れを演習の導入に用いたということである。

(1) 「大人」の文章が書きたい ～ 呼び水としての「子ども」の文章 ～

第2章に書いたとおり、本講義が学生に要求するのは「大人」の文章である。「大人」とは「子ども」でない状態を言うわけだから、「大人」の文章というものを最も端的に言えば、「子ども」の文章ではない文章、ということになろう。それならば、先に整理すべきは「子ども」の文章ということになる。

「子ども」の文章について考えるために、実在するかつての「子ども」（私である）が書いた作文（現物）のコピーを配布し、40数年後の本人（くどいが私である）の音読で聴かせると、あちこちから小さな笑いが起こり、読み手の私も時々こらえきれず吹き出してしまう。一読後、その文章の特徴を学生に発表させてみると、「すべてが時系列通り」「この子はよほど固有名詞が好きらしい」「ダイレクトな表現が多い（婉曲表現が少ない）」「途中まで書いて疲れたのか後半は大雑把」「漢字と平仮名のバランスが悪い」などの指摘があった。

ここで「では、皆さんも、何年ぶりかで『子ども』の文章を書いてみましょう」と学生に振る。いかにも「子ども」っぽい文章を「大人」になった今の頭で考えて書くのは思いのほか難しいようで、「あ、大人っぽくなっちゃった」と苦笑しながら作業を進める姿がほほえましい。『星の王子さま』の序文（献辞）に「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。）」とある（※5）が、ひとたび「大人」になってしまうと、「子ども」のように感じ、考え、書くということが容易にはできなくなるのであろう。

「大人」の文章を学ぶためにはまず「子ども」の文章の攻略から、という話で思い出したことがある。以前何かの研修でストレス解消法に関する話を専門家から聴く機会があった。全身の力を抜いて体のこわばりを解きましょう、という場面で講師が言うことには「脱力のためにはまず全身に力を入れてふんばらないといけません。そうした後でふっと力を抜いた時の感じが、いわゆる脱力状態なのです。」この話を聞いて、なるほどそういうものかと感心させられたものだが、この理屈を文章表現法の話に当てはめるならば、力加減の絶妙な「大人」の文章をものしたいのであれば、まずは加減を知らない全力勝負の「子ども」の文章に当たれ、ということになろうか。

演習を通じて「子ども」の文章を思い出した受講生には、次なる課題として当然「大人」の文章が待っている。「大人」の頭に「子ども」の文章はストレスであるから、受講生は早く「大人」の文章が書きたい、そう思うだろう。「書きたい気持ち」には、こうした、時にまわりくどいストーリーも必要なのである。

(2) 偉大な先輩に近づきたい ～ 昭和の青春に令和のアオハルを重ねる ～

私などには信じがたいことだが、平成を代表するマンガ家さくらももこが本学のOGであることを知らない学生が学科に一定数いる。マンガのみならず文筆にもその才能を発揮し、平成を代表するエッセイストでもあったこの不世出の異才が、自分たちの先輩であることを知らずに入学してきた学生が案外多いのである。さくら自身が自らの短大生活についてあまり多くを語らなかったことや、学校も殊更にこれをPRしてこなかったことから、そもそも地元民の認知度からして低いのかもしれない。あるいは単に「平成も遠くなりにはけり」ということだろうか。

本学に通っていた頃の彼女のエピソードを授業で紹介し、今あなたがたが座っているその席にさくらさんが座っていたのかも（本授業は創立時の趣を残す本館校舎内の教室で開講している）、という話をする、え！さくらももこってこの卒業生なの？という反応をする学生がちらほらいる。そのような時は、どうして今日の今日までそれを知らないで来られたのかなぁとからかった後で、決まって読ませる文章がある。さくらの自伝エッセイ『ひとりずもう』（※6）に収められた「方向転換」というエピソードである。

本学の前身である静岡英和女学院短期大学・国文学科に推薦での入学を希望していた当時県立清水西高校3年生のさくらが、模試で書いたエッセイを赤ペン先生から「清少納言が現代に来て書いたようだ」と激賞される。うれしさで体が熱くなった彼女は帰宅後すぐ風呂場に行き、ホースで水を浴び、水風呂に浸かる。そして「私は将来、エッセイを書く人になりたいな……と思った」その直後「ふと“エッセイを漫画で描いてみたらどうだろうか!!”と思いついた」と記している。「このろくでもない風呂場全体が、虹色に包まれているように感じた」というさくらももこ節も印象的な名品である。本作にはマンガ版（※7）もあり、そちらでも作者の人生を変えたこの場面が作品のハイライトとなっている。

最近、作家の朝井リョウが「言葉の名手が選ぶ、あの人の言葉」という雑誌の企画（※8）でこの場面を挙げ、「さくらさんはこの後、虹色に輝く風呂場を出て、近所の文房具屋に向かって走りだします。僕はこのお風呂場のシーンを読み返すたびに、長編小説を成立させるための“ハブ地点”を見つけられたときの瞬間をすごく思い出します。」と語っている。そしてさくらの文章術にふれ「なんでもない部分の文章でクスッとさせることができると、なんでも面白くすることができるのだと学びましたね」と、影響を受けたことを告白している。

OGさくらももこの著作を教材に採ったのは、いわゆる「自校教育」のためではない。『ものものかんづめ』を初めとするさくらのエッセイ集は平成期の中高生には「朝の10分間読書」用図書の定番であり、彼女の文章にふれたことがきっかけで本を読むのが好きになったという生徒は少な

い。平成期をほぼまるまる高校現場で暮らした私はそれを肌で覚えている。昭和世代に星新一がいたように、平成世代にはさくらももこがいたのである。そう考えると、四十数年前にこの教室で講義を聞いていたであろう彼女が、授業を終えるやアルバイト先である静岡駅ビルのハチミツ屋に向かい、帰宅すると明け方までマンガを描き、それからまた短大で学び、という生活の中で見た風景や、その時の心持が想像され胸が熱くなる。

さくらももこが本学に在学中の19歳でデビューしたことを令和の学生に伝え、また少し彼女らの「書きたい気持ち」に火が付いたように思われた。そこですかさず課題を示す。エッセイ「方向転換」に倣って、あなたたちの高校時代のエピソードを書きなさい。さくら先輩の作品のように、お金を出してでも読みたい、そう思わせるようなクオリティを目指すこと。

(3) 「子ども」の心を失わず書きたい ～ 小林秀雄×サン＝テグジュペリ ～

小林秀雄に「美を求める心」という文章がある。ロングセラー『考えるヒント3』（※9）に収められた、文庫本で十数ページほどの長さのエッセイである。高校の国語教科書にも採られていたことがあるが、もともとは中学生を対象におこなった講演を活字化したものであるらしいから、小林の文章の中では平易なものの一つであろう。よく知られているのは、「話は私事になるが、私は、ロンドンのダンヒルの店で…」という書き出しから始まる第7、8段落で、とりわけ次に引用する「堇の花」のくだりに魅了されたという読者は多いだろう。

「例えば、諸君が野原を歩いていて一輪の美しい花の咲いているのを見たとする。見ると、それは堇の花だとわかる。何だ、堇の花か、と思った瞬間に、諸君はもう花の形も色も見るのを止めるでしょう。諸君は心の中でお喋りをしたのです。堇の花という言葉が、諸君の心のうちに這入って来れば、諸君は、もう眼を閉じるのです。それほど、黙って物を見るという事は難しいことです。」

我々は既知のものには淡白な態度を示す傾向があるようだ。だが、「既知」とか「既習」とか言っても、そのものの名前を知っているだけのことで、それ以外の何を知っているわけでもないことが多いのではないか。

『星の王子さま』の「1」冒頭のエピソードが想起される。「ぼく」が「一ぴきのけものを、のみこもうとしている、ウワバミの絵」すなわち「ぼくの絵の第一号」を「おとなの人たち」に見せたところ、そのシルエットからただの「ぼうし」ではないかとあっさり片づけられてしまう。次に「第二号」としてウワバミの体内の様子をスケルトン式で描いて見せたところが、今度は、そんなことより地理・歴史・算数・文法に精を出せと叱られてしまう。名前が付けば安心し、理解を超えたものからは目をそらす。「ぼく」は言う。「おとなの人たちときたら、じぶんたちだけでは、なに一つわからないのです。」

ところで、「美を求める心」には8段落の終わりに次のような記述もある。

「知識の浅い、少ししか言葉を持たぬ子供でも、何んでも直ぐ頭で解りたがる大人より、美しいものに関する経験は、よほど深いかも知れません。実際、優れた芸術家は、大人になっても、

子供の心を失っていないものです。」

ここでようやく「黙って物を見る」ことの演習に入る。受講生は前々回の演習で“ごく日常的な光景”として「授業時の教室内」を、前回の演習で“あまり日常的ではない光景”として「アルマジロが立っている姿」を、まずは絵に描くことで細部までよく見ることを体験済みである。今回彼ら彼女らが「黙って」「見る」のは、それぞれのペンケースに入っている私物のシャープペンである。これを「子ども」の目で眺め、「大人」の文章で綴るとというのがお題である。

(4) ノープランで書きたい ～ キラーワード「相談」の活用 ～

作家の磯崎憲一郎からいい言葉を教わった。磯崎が「小説を駆動する力」の演題で行った講演(※10)の中で使っていた「相談」という語である。一切のプロットなしに小説を書いているという彼は、自分は先に書いた文と相談して次の文を書いているに過ぎない、というようなことを話した。「相談」という言葉自体は何も目新しいものではないが、その「相談」の相手が「文」と来た。擬人法である。当時高校生を相手に黒板を用いた「リレー小説」演習を重ねていた私は、いい言葉だ、授業で使える、と思った。

以後、磯崎の書くものが気になっていたが、彼が同じく芥川賞作家の円城塔との対談(※11)で自らの小説作法にふれ、「そこまで書いた部分と相談して次の一行を書いているような感じ」と語っているのを見つけ、「相談」はやはり選び抜かれた語であったか、と感動を新たにした。その後彼が様々な媒体でおこなった発言や対談の記録、短いエッセイなどを集めた『金太郎飴』という本(※12)が出て、彼のこの「相談」理論がデビュー以来何度も繰り返し発言されてきたものであることを知った。その事実がありありと判る著作に『金太郎飴』と名付けて世に出すセンス(本書「あとがき」によれば、書名については「編集者も含めて、相談したほぼ全ての人から反対された」とのこと)も含め、三たび感動した。いつも同じことを言っている人をこそ私は信用する。

第3章の冒頭に書いたとおり、授業後半の第8回から14回までを「フィクション編」とし、目の前にある事物や光景の描写について学んだ前半と区別した。その後半を貫く演習タイトルを「文章は『相談』することで続く」としたのは、磯崎「相談」理論へのオマージュである。文章の継続には前の文との「相談」が必須であるという擬人法を用いた理屈は、高校生にも短大生にも解りやすかったようである。文章を書く工程は孤独との戦いのようにイメージされがちだが、こんなに近くに「相談」相手がいたではないか、という新鮮な驚きも、受講生の「書きたい気持ち」を盛り上げる要素となっているように思う。授業者・学習者いずれにとっても「相談」はキラーワードなのである。

ひとりが1文ずつを書いて展開させていく「黒板リレー小説」の詳細については、すでに複数の媒体で報告してきており(※13)、内容の重複が多くなりそうであるため本稿では割愛する。

(5) 神様の発想に倣いたい ～ 星新一「ひらめきの法則」に学ぶ ～

星新一が『きまぐれ博物誌』(※14)に収録の「SF短編の書き方」というエッセイの中で、ア

イザック・アシモフの著作から受けた「最大の感銘」として、アシモフが言う「科学的発見」のための三条件についてふれ、これを「小説の場合にあてはめても同じ」としている。アシモフの言う三条件とは、星の要約を引用すると「一、知識の断片を、できるだけ多く、広く、バラエティに富んでそなえていること」「二、その断片を手ぎわよく組み合わせ、検討してみること」「三、その組合せの結果がどうなるかを、すぐに見透してみること」ということであるが、特に星が強調するのは「組合せ」のことである。このことに関する記述を同エッセイより三か所ほど抜いてみる。

「新鮮な組合せとは、公式でないもの、既存の常識や感覚にないもの、つまり、組み合わせるものの間がかけはなれていればいるほどいいのである。」(395ページ) (※15)

「組合せの検討の時には、わくにとらわれない気持ちでのぞまなければならない。」(同)

「わくを超えた組合せを作るのは、けっして楽なことではない。やってみるとよくわかる。常識のわくというものは、恐ろしいほど強力である。」(396ページ)

「やってみると」「けっして楽なことではない」が、極めて示唆に富んだこの着想法は、我々の「書きたい気持ち」を揺さぶらないではおかしい。実際、創作指導の現場ではアシモフ由来のこの「組合せ」理論が広く活用されているようである。たとえばSF作家の高井信は著書『ショートショートの世界』(※16)の第三章「ショートショートの書き方」の中で、アシモフ・星の「組合せ」理論にふれ、ここから派生したアイデア発想法として、どう考えても不似合いな形容詞と名詞の組み合わせから物語が発生するプロセスを紹介している。また、ミステリー作家の太田忠司は著書『読んだら最後、小説を書かないではいられなくなる本』(※17)の中で、それぞれ別の人間が即興で思いついた動詞と名詞の組み合わせから、即興でショートストーリーを作ってしまった例を紹介している。

私もこのアシモフ・星の「組合せ」理論を演習に活用しているひとりである。前述の高井氏は「意外な形容詞×名詞」、太田氏は「意外な動詞×名詞」でワークショップを展開したとのことだが、私は去年今年と「意外な名詞×名詞」ということに挑戦してみた。「豚×真珠」「猫×小判」式のものだが、結果は思わしくなかった。まず考えられない名詞どうしの組み合わせ、という時点で受講生にとっては(私にとってもであるが)非常に難題であることがよく分かった。ただ、それでも何編かの秀作が生まれた。ここで紹介できないのが残念であるが、私が勝手に創設した「楓文学賞」の受賞作「進化」はその一つで、「カエル」と「寿司」の組み合わせから生まれた、なかなか皮肉の効いた名品であった。

そもそも「意外な名詞×名詞」でやってみようと思ったきっかけは、先のアシモフ・星の「組合せ」理論の音声版教材ともいべき星新一の講演録『ひらめきの法則』(※18)の存在にある。この中で星が挙げていた「組合せ」の例が「宇宙船」と「キツネツキ」で、「名詞×名詞」のパターンであった。受講生にとっては「キツネツキ」という言葉自体に馴染みがないのと、この語が現代では使い方に注意を要する語でもあったことから、私も解説に窮した。SFの神様・星新一の肉声を聞かせたいという思いと、同時に「組合せ」理論(ここでは「ひらめきの法則」と名付けられている)を本人の語りで紹介したいという思いからの使用であったが、ここは欲張るべきではなかつ

た。次年度以降はまた方法を吟味したいと思う。

おわりに

今回は「日本語文章表現法Ⅰ」でおこなった演習の内訳と、指導の拠り所とした考え方について報告したわけだが、表題がどれだけ中身に反映されているかと考えると、「書きたい気持ち」については多少なりと言及できたように思うが、「育てる」の部分が中途半端に終わったことを認めなければならない。

生徒・学生と向き合って30余年が過ぎた。この間、「育てる」とはどういうことかの解釈が自分の中で定まったためしがない。自動詞の方の「育」をいつも意識しながら、場面ごとで送り仮名を使い分けてやり過ごしてきただけの話かもしれない。「書くこと」の指導とか教育とか言うが、すでに書かれ提出された文章への評価やコメント書きは全体のごく一面のことで、ひょっとすると、学習者をして「書きたい気持ち」にさせる、そのための工夫こそ我々最大の業務なのではないか。近年はそう思って授業に臨んでいる。

ひとくちに「日本語文章」と言っても様々な種類があり、受講生が今いちばん欲しがっているものは、レポートやエントリーシートの書き方に関する情報であろう。それは重々承知している。だが私はこの授業でそれに応じたメニューは用意していない。テンプレートを示し、空所補充の要領で言葉を充填させていく「コスパのいい」方式はできるだけ採るまい、と考えているからである。まずは型からという理屈は解るし、なるほど型を用いれば小レポートや「文書」類は比較的効率よく仕上がるに違いない。だがその指導は初年次教育やキャリアサポートが担えばいい領域だろう。

本講座ではこれからも「書きたい気持ち」に駆られた人間が、それゆえに（できるだけ）苦しんで文章をものするストーリーを大事にしていきたい。「型」もその過程で得られたものであれば、自由にカスタマイズして長く使い続けることが可能となるだろう。（了）

（※注）

- 1 渡辺哲司・島田康行『ライティングの高大接続』（ひつじ書房、2017）
- 2 高田瑞穂『新釈 現代文』（新塔社、1959）のちちくま学芸文庫（2009）において、著者高田瑞穂は「読者を予想し、事実読者を持った表現を一括して、公的表現と呼ぶことにします」（第一章1「公的表現」ちくま学芸文庫版pp. 17）と書いている。現在行政の場などで用いられている「公的表現」とはニュアンスが異なるように思われるが、端的で解りやすい語であるので授業でも活用している。
- 3 村松純光『『書いて書かせる』作文指導の試み』（『ニューサポート高校国語』vol.24～26、東京書籍、2015～2016）所収
- 4 福田恆存『幸福への手帖』（新潮社、1956）のち『私の幸福論』と改題され高木書房刊、のちちくま文庫（1998）所収

- 5 サン＝テグジュペリ作 内藤濯訳『星の王子さま』（岩波少年文庫、1953）のち岩波文庫（2017）
本稿における同書からの引用は全て岩波文庫版に拠った。
- 6 さくらももこ『ひとりずもう』（小学館、2005）のち小学館文庫（2010）、集英社文庫（2019）
- 7 さくらももこ『ひとりずもう 下』（小学館、2008）のち集英社文庫（2014）
- 8 『&Premium／2024年9月号』（マガジンハウス、2024）pp.28～29
- 9 小林秀雄『考えるヒント3』（文春文庫、1976）のち同文庫より新装版（2013）
- 10 日本近代文学館主催「第49回夏の文学教室」（於：読売ホール、2012）
- 11 『図書新聞／2018年1月1日号』（図書新聞社、2018）
- 12 磯崎憲一郎『金太郎飴』（河出書房新社、2019）
- 13 村松純光『「相談」して書くのだぞ。大興奮！『黒板リレー小説』『ニューサポート高校国語』
vol.25（東京書籍、2016）pp.14～15
村松純光「表現のスイッチ4 自分だけの物語を作ろう」教授資料『精選国語総合 教授資料
現代文編3』（教育出版、2017）pp.262～270
村松純光『「書く」の原理を学ぶ ～ 理論と二つの実践 ～』『平成29年度 静岡県高等学校国語
教育研究会会報』通巻13号（静岡県高等学校国語教育研究会、2018）pp.82～89
- 14 星新一『きまぐれ博物誌』（河出書房新社、1971）のち角川文庫（『きまぐれ博物誌・続』とし
て）（1976）、のち再編集され角川文庫（2012）
- 15 いずれも再編集・角川文庫版（2012）の掲載ページである。
- 16 高井信『ショートショートの世界』（集英社新書、2005）
- 17 太田忠司『読んだら最後、小説を書かないではいられなくなる本』（星海社新書、2024）
- 18 C D 星新一『ひらめきの法則』（新潮社、2009）chapter2「アイディアとは異質なものの組
み合わせ」1974年9月6日新潮文化講演会「私の発想について」を改題